みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

水の器のエスノ・サイエンス：南アジアから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009275

器のコラム

水の器のエスノ・サイエンス——南アジアから

南　真木人

インド亜大陸にあたる南アジアの村には、水道が各戸にいきわたっていないところが少なくない。そこでは、飲料や調理につかう水を銅製の器や素焼きの土器にためておく。最近では安価なアルミニウムやポリエチレン製の水壺も市販されているが、財の一つとみなされる銅製の水壺の需要は依然としてある。もっとも、展示したような据え置き型の大きな水入れ壺（写真1）は、あまり見かけなくなった。

水甕は細かな槌目と縦横の継ぎ目からうかがえるように、鍛造（鎚起）したパーツを鑞接してつくられている。なかを見ると、錫引き（錫めっき）がされていないことに気づく。南アジアで見られる銅製の水の器は、大半がこのように地金のままだ。そのため、銅器の内面に緑青が生じていることも珍しくない。

近年、有毒とされてきた緑青はほとんど無害であることが科学的に明らかにされ、私たちも知るところとなったが、南アジアの人びとは古くからそのことに気づいていたのかもしれない。それればかりか人びとは、銅イオンがもつ抗菌効果を経験的に感じとり、水の器としてより積極的に銅製品を用いてきたように思われる。というのも、南アジアではさまざまな金属がそれなりの解釈をもって用途別に選ばれているからだ。



写真1
水入れ壺
インド、
グジャラート州
高さ 93.0

たとえば、日常の食器には従来、青銅製の器が好んで用いられてきた。人びとは青銅が最も食品に金属の味や臭いがうつらないといい、青銅の食器をつかうと微量のミネラルが摂取できて健康によいと信じてきた。鉄製のフライパンや和包丁が鉄分の摂取という点で見直されていることを思うと、ありえない話ではないだろう。

南アジアにおける銅製の水の器は、緑青にたいする観念に文化的な違いがあることを示す。すなわち、西欧、西アジア、日本のように、緑青を有毒と考え、錫引きの銅器をつかってきた文化と、南アジアのように、無毒と考え、地金の銅器をつかってきた文化という違いだ。そこからは、エスノ・サイエンスと呼ばれる民族の科学が、西欧近代の科学とは異なる論理で編成されていることが明らかになる。



写真2
銅板を叩いて鎚起し、水壺のパーツをつくる
（撮影：南真木人、1998年、ネパール）



写真3
鑞接して完成形に近づいた水壺の表面を仕上げに打ち固める。これで細かな美しい槌目がつく（撮影：南真木人、1999年、ネパール）